

子どもと保育研究所ぷろほの 講座風景

子どもと保育研究所 ぷろほ
理事長 山田真理子

「子の心 癒やす プロ養成」

8月21日 毎日新聞



幼稚園教諭や保育士らを対象に、心理学や音楽療法などを学べる専門的な保育講座を北九州市で開講する。

発達障害があったり、心に傷を負ったりした子どもたちに対応できる「プロの保育者」を養成するのが狙い・・・と紹介。

被災地からの受講生の受講料免除、生活支援などが掲載されました。

日本で初めて、3ヶ月入学型研修所として開設。

★基本コース

春期 5月～7月

秋期 9月～11月

冬期 1月～3月

3ヶ月で修了

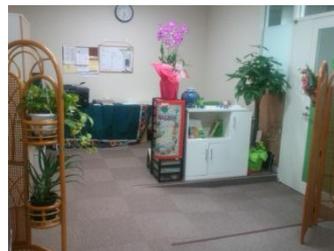
★分割受講

カリキュラムは固定なので、曜日ごとの分割受講が可能。

3日ずつ2期で修了、2日ずつ3期で修了など。

★科目受講

いま必要な科目だけ、資格に必要な科目だけ受講する。



2012年9月4日 第1回開講式

福島からの受講生も



基本コース(3ヶ月)を受講される福島からの先生、分割コースや科目受講をされる方々、理事やお客様をお迎えして、真新しい教室で開講式が行われました。

保育心理

講師：山田所長

まず、最初の講座は「保育心理」。保育心理士資格の成り立ちと役割をはじめとして、保育と心理を繋ぐための考え方や子どものとらえ方の基本を確認します。

今の子どもたちの課題と背景となるメディア環境を知ることで、子育て文化の変化と子どもの孤独感を理解します。この背景を知ることによって、保育者として何を把握しておかなければならないかが見えてくるでしょう。

ぷろほの各科目の内容と目指すものについて解説し、子どもの視点で保育現場を「子どもはどこで安心するのか」「子どもの安心には何が必要か?」「子どもの日常として安定した環境とは?」などに見直すことで、これまで当たり前と思っていた保育環境の偏りに気づきます。これが、ぷろほの科目の基礎になります。

感覚統合

講師：新庄玉恵先生（作業療法士）

今の子どもたちに感じる身体と感覚のアンバランスや偏りには、感覚統合と呼ばれる作業療法分野の関わりが効果があると言われていています。感覚統合療法の中から幼児期の日常の保育の中で取り入れられる遊びや今の子どもたちに必要な遊びを学びます。

ぷろほがある AIM ビルの3階には北九州市子育て交流センター「元気のもり」があり、実際に感覚統合遊びを体験しながら感覚や身体にとっての意味をつかんでゆきます。

○各遊具・遊びはどこを刺激している？

○気持ちが落ち着くのはどんな遊具？

○興奮する・元気になるのはどんな遊具？

○興奮した気持ちを集中したほどよい興奮にするには、どのように遊びを展開して行ったら良い？



受講生の所属する園やぷろほの関係園のビデオを見ながら遊びの分析をしたり、実践を交えた講義です。

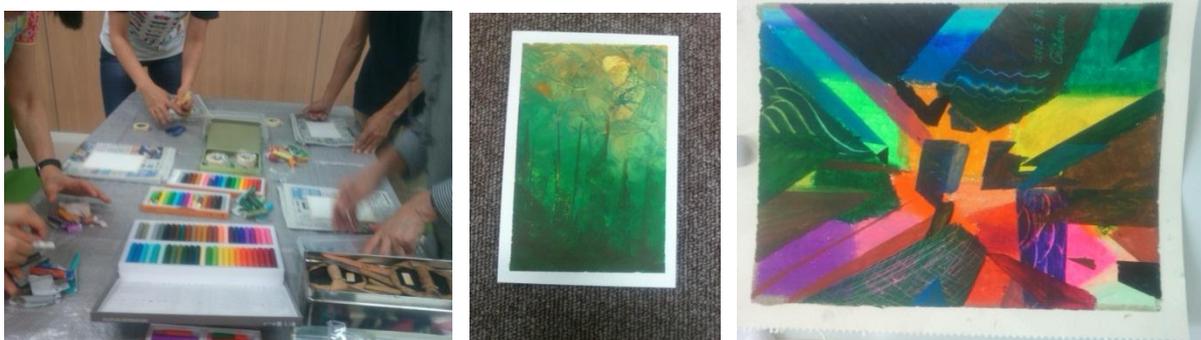
絵画療法

講師：小川直美先生(画家)

クレパス（日本で発明された唯一の画材）を中心に使用した絵画体験を通して、気持ちを表せたらスッキリすることや自分の中から表れてくる表現を受け入れることの心地よさを実感します。いままで絵が苦手だった保育者や学生が、このクレパス画を通して絵を楽しめるようになっていきます。

絵画は「色」と「形」という2つの要素から成り立っていますが、クレパス画は、形を描こうとせず、好きな色を好きなだけ塗ることを繰り返します。この体験は、絵画の苦手さから子どもを開放し、自尊感情を高めます。

マスキングテープを使って紙の周辺には色がつかないようにしておくことが、最後に「完成」を意識するために、重要な役割を果たします。



さらに切り貼りを通した表現、コラージュを体験します。コラージュは「外界にあるものから自分の感性に合うものを切り取る力、自分の選んだもので新たな世界を構築する力」の結合です。この力自体が子どもが周囲の世界と折り合いをつけるために必要であるだけでなく、自分で描かなくてよいことが、絵画が苦手な子どもにも取りかかりやすくします。

下は小川先生のコラージュ。素材は、燃え残った雑誌。燃え残った不要なものも、こんな素敵な色をくれるのです。



絵を描きながらの小川先生の言葉は、その時どきの受講生の心に響きます。

「この紙の上で何しても、お金を失うわけじゃ無し、命を失うわけじゃ無し。思い切ってやってみて？」 「どんなひっかきも、色も、素敵な世界を開いてくれるよ」 「タイトルつけてあげたら、絵が喜んでよ」
・・・

保育人間学

保育を支える人間観をじっくり考える講座。ぷろほの顧問でもある大谷保育協会の脇淵徹映先生と筑紫女学園の笠信暁先生です。

講師：脇淵徹映先生

人間って「自分の生きる意味」を常に考えながら生きている存在（うんうん）
普段はとりあえずの答えを出して生きている（ドキッ！）
意味を見いだすのは自分だが、意味を作ってくれるのは関係性（そうだ！！）
関わることによってしか自分の生きる意味は見いだせない（ジーン）

人は食べないと生きてゆけないが、何を食べるかという四食（しじき）

- ①「段食（物質を食べる）」
- ②「触食（感覚を食べ物とする）」
- ③「思食（人から思われる気持ちを食べて生きる）」
- ④「識食（学ぶこと＝変わることを恐れずに生きる）」こと。

それぞれが受講生の心のありようによって響いてゆく、不思議な講座でした。

講師：笠 信暁先生

幼児期は木の根っこの時代です。根っこをしっかり育てておけば、木は自ずから繁るので
す。

分かるとは、分割する、分けること。英語の **Understand** は下に立つことですね。それぞ
れの国で分かるということがどうとらえられているかが見えます。

教育が命を学ぶことから乖離してしまった現代。人間が思うとおりのものを作った結果
が現代社会の闇です。どこまでも命を延ばしてゆくことが医療なのかということも問われ
ています。

仏様のご縁によって、保育という仕事の中で子どもと出会っています。わたしが保育を
するのではなく、佛の願いに応える道として、保育という場を与えられているのです。そ
して、私は凡夫であり、不完全であるから、この場において学び続け精進し続ける必要が
あるのです。「できない自分に気づくこと」が、まことの保育の始まりであり、できない
自分が関わるのだから、学びが必要。そこにぷろほの意義があります。

保育心理演習

講師：山田所長

ぷろほの特徴の一つは「こどもの視点で考える」姿勢を身につけること。

心理演習は特に、様々な事例を通してはその子どもの視点でその子の体験を見直すワークショップを中心に展開されます。

あるとき、受講生が書いてきた事例を「一人称」で書き換えることで、子どもの内面に近づくワークをしました。

事例：「この子は水遊びが好きで、蛇口を上に向けて水を出し、その水を手に受けて遊んでいる」を・・・

一人称で書き換えると：「ボクは蛇口から水を出して、その水がアーチを作るのを見てると気持ちが落ち着きます。そしてその水を手で受けると、プチプチと手にあたる水が気持ちいいです」・・・

ね！見えてくる世界が変わるでしょう？

子どもが住んでいる世界を、子どもが感じている感じ方でとらえると、子どもの行動の背景にある気持ちが見えてきます。そんな保育者が増えて欲しい・・・それがぷろほの願いです。



カウンセリング

講師：山田所長

カウンセリングマインドは、カウンセラーになるわけではなく相手の気持ちにより添い、人間関係をなめらかにするために保育者が知っておいてほしいことなのです。

自分の気持ちをきちんととらえること、相手の気持ちを偏見なくうけとり、受け取ったことを丁寧に伝えることを学んでゆきます。

自分を知ると言っても、様々な方法があります。ぷろほでは、保育でも使える、保育者集団でも使える方法を体験します。「自分を色にたとえると?」「自分を料理にたとえると?」「身につけるものに例えると」「植物に例えると」といろいろなものに例えてみたあと、その例えたものから連想することを挙げてみると、今まで気づかなかった自分の面が見えてきます。

次に「こころ取扱説明書作り」ワーク。

自分の心の取り扱い説明書を、家電品の取扱説明書を参考に作ってみるワークです。家電品の取扱説明書には、「警告!こんなことは命に関わることがありますからしないで下さい」「注意!こんなことをすると本品が壊れることがありますからしないで下さい」「使い方」「付属品」「こんなときは故障?」などの項目があります。

それに合わせて自分の心の扱い方を書いてみると、自分が見えてきますね。

最後に「風景構成法」



川や山、家や木などを描く中で、そこに現れた自分の内面を見つめてみました。

同じアイテムを描くのですが、一人ひとり決して同じものではありません。そこに、描く人の姿が現れ、それを受け止めることと通して、人と関わる土台ができてゆくのです。

子どもへの暴力防止プログラム

講師：重永侑紀先生（にじいろ CAP）

子どもへの虐待の背景には「力の不均衡」があり、それはそのほかの多くの差別（DV やパワハラ、女性差別）にもする。その歴史的流れや考え方のズレを丁寧に理解してゆくことが、子どもへの理不尽な暴力（身体だけでなく無視や心理的暴力も）に気づける保育者になります。

「あんしん」「じしん」「じゆう」という CAP のキーワードは「人間の基本的な権利」であり、これが奪われたら「人権が侵害された」ということですが、これを幼児にも分かるようにロールプレイや絵を使って伝えます。子どもたちは「安心がなくなることや」「自信が奪われることを」しっかりと「NO!」と言っていいことなのだとして理解します。



様々な子どもへの暴力・犯罪から子どもを守るためには、「危険だから近寄るな」「怖いから話しかけられても話すな」と教えることではなく、「どのようなことがおきたら『安心ではなくなる』と気づき、どう対処したらいいか」を安心できる人間関係の中でシミュレーションすること・・・、重永先生の講座が進むにつれて「子どもたちが自分の自信を持って生きてゆくための環境」に敏感になってゆく自分を感じます。

子どもだけでなく、女性にも「痴漢注意」や「痴漢対策の護身術授業」などという看板や対策は、被害者に「注意しなかったおまえが悪い」「ちゃんと身につけておかなかったからだ」という責めを背負わせる行政や教育の暴力です。「痴漢は犯罪です」という看板に作り替えられた地域が増えてきましたが、「男子の性教育」などは日本ではまだまだ不十分です。

園での取り組みとしては、保護者や保育者対象、子ども対象と丁寧に積み重ねてゆきます。このCAPプログラムを10コマ受講できる機会は、なかなかありませんね。

第1月の3週間が終わると、1週間は講座がありません。

この期間は実習や見学、自分の園に帰って事例研究に提出するケースをまとめたりします。2012年度秋期の受講生は、所長が関わっている保育園（長崎・佐賀）を見学し、第2月で取り上げられる「育児担当制」や「総合芸術療法としての保育」の実際を体験しました。

育児担当制保育（長崎・鴻ノ巣保育園）



公立保育園の委譲により、3年前から育児担当制を導入した園。年齢の低い子どもたちからその効果は年々明らかになり、「自分を一貫して見守ってくれる人がちゃんとしている」ことが、子どもたちを落ち着かせ、発達を促すことを実感することができます。

園芸を基盤にした保育実践（佐賀・友朋会みどり保育園）

園芸療法士や陶芸療法士が同じ法人内の病院にいることを生かして、子どもたちが畑作りから造形や音楽など全ての保育領域、運動会、作品展など全ての行事を連携させて実践している園を見学します。



運動会のために野菜神輿を大型造形していた子どもたち。「真理子先生～！スイカは緑に黒じゃないとよ！」と掛け寄ってくるAくん、「え～？緑に黒じゃないと？」「うん！黄緑に濃い緑！」確かに、目の前のスイカは見事に本物の色をしていました。

子どもたちの体験から出てくる言葉はそのまま詩になって歌になり、畑への行き帰りに歌います。観察力、表現力、コミュニケーション能力・・・全ての発達が

生の体験の中から紡ぎ出されてくる姿を見学させてもらいました。

この見学は、カリキュラム「芸術療法」に繋がっています。

公開講座「メンタルケアとストレスマネジメント

ここねっと緊急支援チーム（宮城） 佐藤秀明先生



（その1）大川小学校（石巻市）の真実

宮城・岩手において震災後の子どもたちの支援を広く実践してこられた「ここねっと緊急支援チーム」代表の佐藤秀明先生。大川小学校の卒業生・保護者と縁があったことから、誰も支援に行っていなかった大川小学校の保護者の支援に立ち上がったのです。

（大川小学校2階の教室床）

生き残った子どもたちの口から次々と明らかになる、教育委員会発表とは違う事実・・・。自然災害で片付けられようとする中、108人中74人の犠牲はあまりに大きかったといえましょう。

祖父母のメンタルケア、兄弟を失いながらも受験に向かう中3生の学習支援・・・しなければならぬことは山ほどあるのに公的支援は届かないのです。

そんな中、保護者とともに常に丁寧に歩み続けてきた佐藤先生から、あれから1年半の大川小学校のお話を聞きました。

（その2）発達に支援の必要な子どもたちと共に

この公開講座で、何人もの方が救われました。

佐藤先生の「温かさを持った光のように降り注ぐ言葉」からいくつかを紹介。

「頑張らなくていい、なんて言わなくていい。子どもたちはもう頑張っているんだから、頑張っている子どもたちを応援できる人になって欲しい。」「先入観を持たないと言うことと、情報を持たないと言うことは同じではない。情報を持たずに支援の必要な子どもに会うのは失礼」「振り返りの会は、自分の良さを知り互いに認め合うための会。反省会、糾弾会ではない」「キャリア教育とは。相手のために自分がしてやれることを見つけ、行動に移すことを手助けすること」「知能検査とは、子どものいい所を見つけるためにやるもの。検査結果は良さの観点で子どもに最初に伝え、頑張っていけるヒントを一緒に見つけるためのもの」・・・。

ぷろほでは、各期に2回ずつ佐藤先生の公開講座を企画します。

第2月に入ると、ドラマワークや音楽療法、親支援プログラム、タッチケアなど体験型カリキュラムにシフトします。

音楽療法

講師：西林淑子先生（音楽療法士）

音楽のメロディーとリズムを身体で感じて身体が自然に動く心地よさや、音に合わせて身体やボールをコントロールするなかで、自己コントロール感が育ってゆく……。そのような音楽療法の視点を実感しながら、リトミックへと。



楽器があるからといって曲を弾こうと思わなくていいの。子どもに、いろんな早さで動いて欲しいでしょ？だから、こうリズムを変えて、黒鍵だけで即興で弾いてみて…

リズムに合わせて身体が動かない子どもたちが増えている中、演奏や合唱を強制するのではなく、楽しく身体でリズムを感じて遊ぶ保育が展開されて欲しいと願います。

「普通ね、左手で和音弾いて伴奏するでしょ？でも、左手不器用だから左手で複数音を引いたら重くなるの。だから、左手は一音でいい。右手でメロディー音を含む和音で弾けば、ほら！～軽くなって、動きたくなるでしょ？」いままで、左手で伴奏を弾くものと決め込んでいたのが目から鱗。

「和音はね、ご飯とみそ汁と漬物。それがすっきりしていれば、何にも合うの。ところがこの頃の歌は時々、納豆にジャムとかケーキとみそ汁？みたいなものがある。子どもの体のリズムに合わない曲がいっぱい。だから子どもたちの体がリズムを刻めなくなっちゃう。分かりやすくしてやれば、自分で出したいときに出せるようになるのよ」……

保育者養成で、このようなことを教えてもらえたら、たくさんの保育者のピアノ嫌いが治る気がします。

タッチケア & わらべうた

講師：吉柳三枝子先生（タッチケア）、大屋省子先生（声楽家）



まず、お互いが体験することで、人の手ってあったかいなあ～♪気持ちいいなあ～♪を実感しました。そんな体験をお母さん自身が感じてもらうことが大切なのでしょうね。

それがわらべうたにのって行われるとさらにいい雰囲気が漂います。

子どもたちや保護者とのコミュニケーションにピッタリなカリキュラムです！

わらべ歌あそびもいろいろ覚えて、ふとしたときに子どもたちとのやりとりをもっとリズムカルな楽しいものにしてくれます。



先週から、タッチケア&わらべうたの講座には、事務局のミホさんの子どもさんが参加。一緒に歌を歌ったり、遊びの中に入ったり。「に一ぎり、ぱっちり、たてよこひよこ♪ピヨピヨ・・・」のホワホワの布を手放さない1歳児。バスタオルのハンモックに包まれてご機嫌の3歳児・・・。

来年は子連れの受講生の予定もあり、楽しみです。



ドラマワーク

講師：吉柳佳代子（表現教育家）

ドラマワークは体と言葉と表情と動きを使って総合的に表現しながら、コミュニケーションとイメージで遊ぶワーク。楽しいワークに始まり、劇作りまでをチャレンジします。

日常のごっこ遊びの中で、本気になって「真似」「つもり」「もし」を遊んでいる子どもたち。保育者とその子どもたちの想像力を豊かに感じ取って展開できたら毎日をもっと楽しくなるかもしれません。そして、ドラマ的な仕掛けを保育に持ち込むと、子どもたちの日常はにわかにカラフルになる気がします。



ある日のワークを紹介しましょう。

①ティッシュ1枚でどれくらい遊べる？



できるだけ長く吹き上げる、吹いて体で受ける、吹き上げて落ちてくるティッシュの真似をする。ティッシュを立てる、ティッシュの鎖で人間知恵の輪・なんと45分遊びました。しかも、体をいっぱい使い、息もハアハア。室内で、走り回らなくても、しっかり体を使って楽しく遊べることを感じました。そして、それを支えてくれるのは想像力ですね。

②私は木です。（木の周りの風景を作ってみよう。）



どんな風景でもいいのですが、木の周りの風景の一つになって関わってゆきます。間違いは無い、否定されない、周りとの関わりで意味が見つかってゆく・そんなことを体感しながらのワークになります。

次に、その中の一つだけ残って（例えばその木の下に座っていたサラリーマン）、他の人は再びその周りの別の風景を作ってゆきます。登場したどれもが主人公になりうるこのゲームは子どもたちにも何かを伝えますよ。

言語治療とアセスメント

講師：牧野桂一先生（筑紫女学園）

言語治療の講座は、保育分野の言語治療の専門家を作り出そうとした、ぷろほの新たな挑戦です。小児科医や心理士・保健師にも通用する保育者の視点での言語保育発達検査を構成し、ぷろほがそれができる専門家としての資格認定をします。

今まで保育と直結した検査はなかったし、今ある検査はその結果からどのような保育現場での工夫が生まれるのかが示唆されませんでした。言語保育発達検査はその結果と保育がきちんと繋がり、その専門家として言語保育セラピスト資格を認定されます。

この発音に困難を抱えている子どもには、こんな遊びやこんな唱え歌を保育の中で・・・、こんな遊びは息や発声を促します・・・、そんな実践に結びついた言語治療のハウツーが学べます。

ことばは毎日、生活の中で使うもの。どこかで発音だけ、ことばだけの練習をするより、正しいステップで毎日遊びの中で実践された方が効果も大きいのです。発音の練習といっても、声を出させることから始まるわけではありません。まず聞き分ける、短音や無意味語から有意味語を聞き出したり、間違いに気づいたり・・・。そんな遊びを日常に取り入れることからです。

ことば遊びやことばの指導は、ことばを獲得する時期を預かっているのですから、保育者として丁寧に身につけたいですね。

発達検査

講師：山田所長

乳幼児期の知能発達や多動やこだわりなどの発達検査の中から、保育者が日常の遊びの中でチェックできる検査項目を取り上げ、そのポイントをつかむと共に、発達のデコボコがあったときにその課題を身につけるために保育の中で取り組んでゆくスモールステップを考えます。

ことばについては言語治療の講座で取り上げるので、発達検査の講座では多動・対人関係、運動機能、認知などについての項目を取り上げて学んでゆきます。

表現療法（読み聞かせと創作童話）

講師：山田所長

絵本の読み聞かせやことば遊び、創作童話の世界に触れてみる科目です。読み聞かせは実は読み手の中のイメージや思いの深さが表れます。読み手の背景に感じる世界が広いほど、子どもの中に豊かなイメージを拓けます。では、読み手の心の中の世界を明確にするには・・・？はつきり意識したとたんに、表現が変わる楽しさを受講生は実感します。

ことば遊びは想像力をいっぱい使い、自分の中から浮かんでくるものを楽しみ、他の人の発想に笑い・納得する時間です。思いつく言葉が何であれ、それで損をしたり怪我をしたりすることはありません。いろいろなことば遊びを体験する中で、自分の発想がどんどん柔らかくなってゆくを感じるでしょう。

（例）○○○には動物や草花などの名前、●●にはあなたの好きなものを入れて下さい。

すきなもの	のはらうた
みみすみつお	くどうなおこ
わたしは ひるねが すきです	より
あなたは なにが すきですか	
（創作）すきなもの	
○○○+自分の名	
わたしは ●●がすきです	
あなたは なにが すきですか	

創作童話は、オノマトペ（擬音語・擬態語）だけを使った童話やアクティブイマジネーションを使った展開などを体験し、新しい自分を発見する時間です。

子どもに向けて話すときはいつも即興創作かもしれません。

保育の中では意外と多い「脅し童話」。「歯磨きしないと虫歯になるよ～」「好き嫌いをすると大きくなれないよ」「片付けないとおもちゃがどこかに行っちゃうよ」・・・これらは脅しによって子どもを動かすお話しです。もっと、日常保育の中で使える「子ども自身が楽しくやる気になってマナーが身につく創作童話」や「子どもがその気になってその遊びに入るための導入童話」などができる保育者だと、子どもたちも自信を持って、達成感を持って毎日を過ごすことができるようになりますよ。

親支援プログラム

講師：岡田健一先生（臨床心理士）

保護者支援が保育者の役割として明記されましたが、そのための保育者の資質向上が保護者の現状に追いついていない事実もあります。なぜなら、保護者支援が保育者の役割となった背景には、コミュニケーションが難しい保護者が増えたことがあるからです。難しい保護者とのコミュニケーションスキルのトレーニング無しに保護者支援を謳われても、適切な支援ができるわけがありません。

ぷろほの「親支援プログラム」は、保護者の抱える課題を学ぶ面もありますが、実際にコミュニケーションゲームやカードやゲームを使った意見集約の方法など、具体的に保護者会などで使える様々な方法を体験します。

グループワークの進め方一つで、保護者は話しやすくもなるし、先生を信頼もするのです。

最終回の親支援プログラムは、これまで学んだことをプログラムして自分たちなりの保護者会をシミュレーションして実演してみました。4つのグループがそれぞれの...得意分野や習ったゲームを生かしながら実演してゆくと、保護者役の他のメンバーも、こんな保護者会ならリラックスできるとかこんな保護者会をしてもらったら園が信頼できるなどの感想を持って終わりました。こんな関わりによって、コミュニケーションが苦手な保護者が園になじめれば、もっといろいろな保護者の拡がりを作れそうなワークでした。

受講が終われば長崎・福島・大分・福岡・久留米とバラバラになる受講生たちは、ここで一緒に学んだことは一期一会とも言えます。講師の先生が持ってきて下さったケーキで最後のお茶会をして終わりました。



臨床心理学

講師：岡田健一先生・山田所長

こころという、このとらえようのないものを、心理学ではどのような構造としてとらえよう治してきたのか？その様々な理論ととらえ方、そして心理臨床のありようを学びます。心は幾層にも重なって、見えるところと見えないところが錯綜しています。心の中を表すイメージや昔話、民話。そこから読み取れる心象風景などは、私たちの多くのことを教えてくれます。

その過程は同時に自分の心の中と向き合う作業にもなるでしょう。自分の心を映し出す箱庭や絵画を通して、自分をより深く知って風通しをよくする機会になれば、それは保育を温かい浄化されたものにしてくれるでしょう。

また子どもの心の背景にある無意識的な SOS や主張を受け止められる保育者、虐待の背景にある人間関係のもつれや孤立に気づけるためのポイントを学びます。虐待や PTSD への日常でできるケアなども伝えられたらと思います。

子どもの日常に最も長時間関わっている保育者が、そんなアンテナを持ってくれることは子どもたちにとって、安全感を高めることになるでしょう。

個別支援・事例研究

講師：山田所長

どちらも、実際に園で出会っている子どものケースレポートを元に、どのような支援ができるかを考えてゆく講座です。

個別支援の方は、科目受講生の提出するいくつかの事例を一緒に考えます。現在その子どもへの園の対応に困っている場合が多く、1回に4～5事例を検討することになります。それぞれの事例を通して、子どもの課題となる行動の背景の読み取り方や支援の方法を学んで園に持ち帰ることになります。

事例研究は、事例を検討するということの意義から、守秘義務のある事例レポートの書き方や提出の仕方、回収資料の出し方などから学びます。継続して受講している受講生のケースを、より時間をかけて丁寧に検討することで、その受講生が自分の園に帰ってケース会議の中心となって進めてゆける人材になることを目指します。

保育心理や保育心理演習学んだことと繋がって子ども理解が実践的に深まったり、感覚統合や発達検査、言語治療などで学んだことを実践に移すタイミングや具体例を学ぶことにもなります。

第3月は、これまでやってきたそれぞれの科目の後半に入って、実践に生かすモデル実演などが中心になります。それに加えて、いわば卒論にあたる総合演習での論文作成。その中で「障害と保育」はいわゆる「障害児保育」ではなく「障害論」、障害を社会はどうとらえるか？など、障害への自分の認識を振り返る講座でもあります。

総合演習

講師：山田所長

総合演習はテーマに基づいて資料を研究したり、それまでの自分の体験を論文化したりする講座です。研究発表や論文投稿などに向けてまとめてゆきます。

受講生それぞれの立場によって持っている課題や研究テーマは異なりますが、（保育に関する）どのようなことに関心があって、どのような問題意識を持っておられるのかを話し合い、資料を集めたりするところから始めますので、自分の中を整理する時間にもなります。

秋期では福島からの受講生が福島での1年半を振り返ってまとめ、「ほいくしんり」に投稿しました。卒論や修論のお手伝いもできたらと思います。

障害と保育

講師：原陽一郎（九州大谷短期大学）

何を障害ととらえ、その障害をどうとらえるかによって、その子どもへの関わりは変わります。ですからこの講座は「障害児保育」ではなく「障害と保育」としました。私たちの障害への無意識の差別感や同情の気持ちに気づき、保育の中で「人間としての尊厳への尊重」を持った関わりが見いだせるよう、様々な視点で考えてゆきます。

養成課程で障害児保育の科目がなかった保育者も多くいる現状の中で、保育への、障害への、子どもたちへの熱い思いを共有できる仲間が生まれてくれることを願っての講座です。

地域の私立幼稚園連盟研修もサポートします

ぷろほの表現ワーク体験と福島からの受講生の講話



ドラマワーク「私は木です」
木の周りの色々な風景を作ります。
どんなものにもなれる、間違いなんかない子どもの世界。

福島から来てぷろほで学んだ伊藤ちはるさん
福島の保育の現状を聞くと、胸が詰まります。

